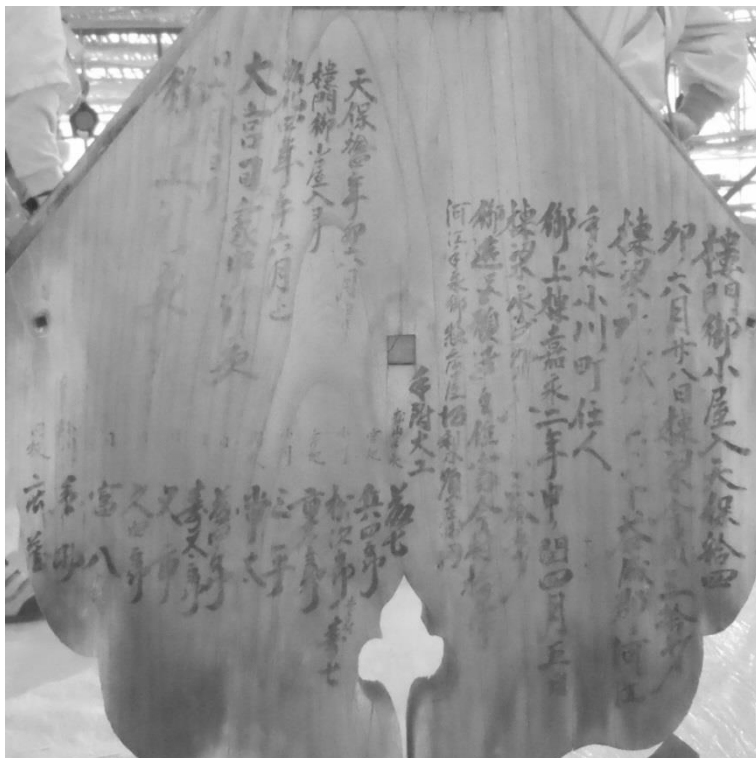


修理工事こぼれ話⑦ 楼門造営に関わった大工さん

前回のコラムで紹介した墨書には、大工棟梁であった水民元吉の名前が書かれていましたが、今回の工事で発見された墨書の中には、棟梁以外の大工さんの名前もいくつかみられました。今回は楼門を建てた大工さんについて紹介します。

楼門2階の屋根に懸魚と呼ばれる部材が取り付けられていますが、その北側の裏に棟梁以外の大工さん14名の名前が書かれていることが以前より知られています*。この墨書には出身地も書かれており、阿蘇や棟梁の出身地近辺から来ていることがわかります。



懸魚

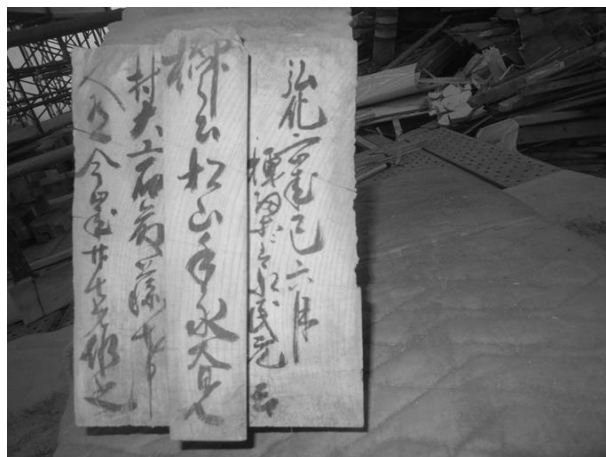
↑ 楼門北面

← 楼門2階北側懸魚 裏面の墨書

御上引受	同六月ヨリ	大宮司家中引受	弘化四年六月迄	楼門御小屋入ヨリ	天保拾四年卯六月ヨリ	御上引受	御造宮願達主位家	棟梁水民□□□三拾五才	棟梁水民□□□	手永小川町住人	御上棟嘉永二年申ノ閏四月五日	（元吉今歳）	下益城郡河江	（元吉）	棟梁今歳三拾才	卯ノ六月廿八日	楼門御小屋入天保拾四
内牧	同	同	同	同	同	内牧	今村撰津	坂梨順左衛門	手附大工	松山手永	宮地	宮地	小川	宮地	小川	宮地	小川
廣蔵	原助	富八	久四郎	又市	壽太郎	藤四郎	井出村	壽七	藤七	兵四郎	松次郎	重太郎	三平	常太	内牧	同	同

*『阿蘇市文化財調査報告 第一集 阿蘇市指定有形文化財 阿蘇神社建造物調査報告書 一の神殿・二の神殿・三の神殿・楼門・神幸門・還御門』阿蘇市教育委員会生涯学習課・宗教法人 阿蘇神社、2006

また、この中の何人かの大工さんは、他の箇所でも自分の名前や出身地、その他様々なことを部材に残しています。その一部を紹介します。



下層組物拳鼻

藤七は弘化2年(1845)に27歳ということなので、文政2年(1819)生まれであると推測されます。

弘化二歳己六月
棟梁は水民元吉
抑宇土松山手永大見
(石藤)
村大工□□藤七中
人共今歳廿七才作之



下層化粧隅木

上の写真の藤七は長井と名乗り、左の写真では石藤と名乗っていますが、同一人物であると思われます。

宇土郡
松山手永大見
長井藤七



下層化粧隅木

三平は、懸魚では小川出身と書かれていますが、上の写真では現在の熊本市内出身であると書かれています。

仰九州肥後
熊本坪井
立町大工米屋
三平



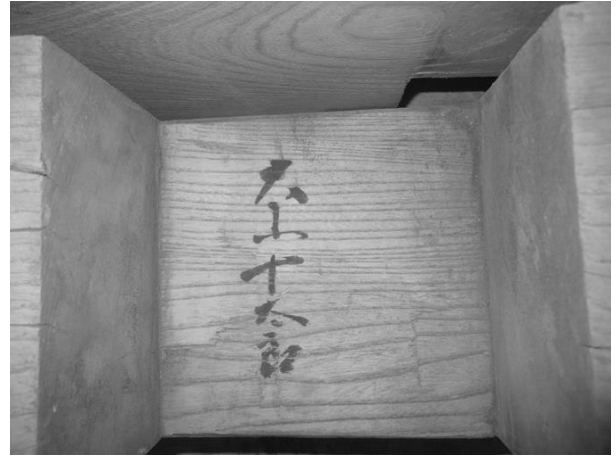
下層腰長押

造営時に用いた番付と、名前・出身地が書いてあります。
三平は番付を記す役目を担っていたのでしょうか。

拾貳番
肥後熊本
大工三平



下層牛梁



上層尾垂木

左の写真は重太郎、右の写真は十太郎となっていますが、おそらく同一人物です。

印 重
太 大
郎 工

大
工
十
太
郎



下層布裏甲



上層切裏甲

藤七は、途中から楼門造営の棟梁を引き継いでいます。棟梁脇というのは、副棟梁のような意味なのかもしれません。

帯屋というのは屋号でしょうか。

大 工 棟 梁
水 民 元 吉
棟 梁 脇
藤 七

内 牧 町 帯 屋
常 太



上層尾垂木

内牧出身の大工さんは7名いるので、顔の絵はその7名の誰かが描いたのかもしれませんが。

阿蘇
内牧
町



下層化粧隅木

これもおそらく大工さんが描いたのでしょう。



下層巻斗

百人一首にもある和歌と、造営時に用いた番付が書かれています。
和歌は、この番付を書いた大工さんが書いたのでしょうか。筆跡が異なるので三平ではないと思われます。

い
ノ
五
番
錦
な
り
け
り
川
の
紅
葉
は
龍
た
川
の
嵐
吹
く
三
室
の
山
の



上層切裏甲

「鳩に三枝の礼有り。鳥に反哺の孝有り。」ということわざの前半部分です。
このことわざを書いた墨書は、3箇所から発見されました。

鳩
有
三
枝
禮

文化財建造物の解体工事では、このような墨書・墨画以外にも当時の大工さんの痕跡が色々出てきます。これらのような痕跡に接していると、なんだか造営時の大工さんたちが身近に感じられるときがあります。そういう感覚を得られるのも、この仕事の醍醐味の1つなのでしょう。

(石田 陽是)